

友達の巨乳お母さんと
中出しセックス
した話

上巻



フルカラー60P

欲求不満の人妻、麻美(あさみ)にエッチに誘われる翔君。麻美は友達のお母さんだけど……

友達の巨乳お母さんと
中出しセックスした話 上巻

作・画 窪リオン

翔君、明日、
遊びに来ない？

たかしのお母さん、
麻美(あさみ)さんが
言った。

明日、
たかしとお父さんは
出かけていて、

麻美さんしか
いないそうさ。

麻美さんは、
僕に悩みを聞いて
もらっていたと
言ってきた。

カクン

僕は麻美さんの
事が好きだった。

おっぱいと
お尻が大きくて、
凄く良い匂いがした。

そんな麻美さんに
悩みがあるなんて……

ど、どの？

うん、
いいよ！

僕で悩みが
なくなるならいいな、
と思った。

翌日、
僕は1人で
たかしの家に行った。

麻美さんは、
僕を膝に乗せ、
ジュースと
お菓子をくれた。

僕は
幸せな気分
になっていた。

翔君、
私のおっぱい、
よく見てたでしょ？

スカートの中も
覗いてたし

え!?

アイ

わあ。

アイ

そう、僕は
我慢できなくて、

麻美さんの
おっぱいや
ミニスカートの中を
チラチラ見てた。

ごめんなさい

僕は
怒られるのかと
思ったのだが……

ううん、
違うの

むしろ、
私を意識して
くれていて
嬉しかったの

麻美さんは
僕に
抱きついてきた。

とんとんとん

翔君、
私の事、
好き？

そんな事を
聞かれると
思わなかつた。

うん、
好き……

あは、

僕は
正直に答えた。

僕は優しい
麻美さんが
大好きだった。

嬉しい！
私もね、
翔君の事が
大好きなの！

そんな事を
言われるなんて、
びっくりした。

え!?

でも、
麻美さん、
結婚してるし……

そうなの、
でも夫は私の事、
愛してないの

ええっ!?

麻美さんの
ような奥さんを
愛してないなんて、
信じられなかった。

夫は
若い女の子が
好きなの

だから、
子供を産んで
年取った私には
興味ないの

ええっ!?

そんな男の人が
いるなんて、本当に
信じられなかった。

僕は麻美さんが
可哀想に
なってきた。

り、離婚は？

ああ、
ああわ...

それも
考えてるけど、
生活費は夫が
出してるし、
たかしの事を
考えると.....

でも、
このまま年を
取っていくだけ
なんて悲しくて.....

麻美さんは
僕を撫でながら
言った。

あのね、
女の人は、
好きな人に
愛して欲しいの

愛するって
わかる？

ふふ

……なんとなく

キスするとか？

そうね、
キスは大事よ

レレレん...

僕は
だんだん
ドキドキしてきた。

あとね、
裸で抱きあつたり
愛撫し合ったり
するの

……お父さんと
お母さんが
してるの
見た事ある

翔君の
お父さんと
お母さんは
仲が良いのね

僕の両親は
仲が良く、
しょっちゅう
キスしてた。

女の人はね、
そうやって
愛撫されないと
死んじゃうの

え!?

じゃあ
麻美さんも
死んじゃうの!?

麻美さんが
死んじゃうなんて、
凄く悲しい事だった。

んんん!

僕は怖くなった。

そんなのやだ！
死んじゃだめだよ！！

僕は麻美さんにしがみついて叫んだ。

ん
あ
あ

ありがとう、
翔君

私も死にたくないの

だからね、
翔君が良かったら、

エッチして欲しいなって思ったの



え？
エッチ？

愛するって
ことよ

愛することと
エッチが
同じだと、
今気づいた。

あ
う……

でも、
僕でいいの？

どうすれば
いいのか
わからないよ

お父さんと
お母さんが
していることを

自分が出ると
思えなかった。

大丈夫、
私が教えて
あげるから

そんなに
難しくないの

うん。

……僕に
出来るかな？

うん……

ん
ん
ん

僕は失敗して
麻美さんに
嫌われたく
なかった。

私のおっぱい、
見たい？

え？

あの……

見たいです……

僕は正直に
言った。

おあ……

嬉しい！
揉んだり
舐めたりしても
いいのよ！

え！

麻美さんに
そう言われて、
僕はとたんに
興奮してきた。

おチンチン、
大きくなってる

あの、これ、
病気なんだ……

僕は恥ずかしく
なった。

あ……
うあ……

普段から、
エッチなことを
考えると
大きくなっていた。

大丈夫、
病気じゃないよ

うらぶ♡

好きな人と
エッチするの
考えると、自然と
こうなるの

そ、そうなんだ

僕は麻美さんが
好きだから、

これは病気
じゃなくて
安心した。

はあ、

で、でも
痛くて
たまらないんだ……

そうね、
じゃあ、
私が楽に
してあげる

あ……

あ
あ
あ

そう言うと
麻美さんは
僕を立たせズボンを
脱がした。

恥ずかしいよ……

大きくなった
おチンチンを
麻美さんが
じっくり見てきた。

わあ♡

そう言ったが、
実は見られて
気持ち良かった。

不思議な
気分だった。

立派よ翔君。
私、嬉しい

僕も
嬉しかった。

ほら、
ここに来て

おっぱい
吸っていいからね

ブラもとるよ

麻美さんは
服を脱ぎ、
大きなおっぱいを
見せてくれた。

僕は麻美さんに
言われ、ソファに
寝た。



僕の目の前に
裸のおっぱいが
あった。

僕は我慢できなく
なり、そのおっぱいに
しゃぶりついた。

ああっ！
凄い！
翔君、凄いよ！

ああっ！
気持ち良い！
嬉しい！

ちゅば

ちゅば

麻美さんは、
喜んでくれた。

僕も嬉しく、
さらに興奮した。

吸うだけじゃなくて、
乳首を舐めたり、
軽く噛んだり
してみても

僕は、
言われた通り、
舌で乳首を

レロレロと
舐めたり、
前歯で軽く
噛んで見た。

はあ

はあ

レロ
レロ
レロ

レロ

ああ、いい。
凄くいい……
こんなの久しぶり

嬉しいよ、
翔君

かわりに
おチンチンも
気持ち良くして
あげるね

そう言うと、
麻美さんは、
僕のおチンチンを
優しく握った。

握られた瞬間、
僕の体に
電気が流れた。

大丈夫。
リラックス
していて

ああっ！

僕は、なんとか
緊張しないように
頑張った。

麻美さんは、
そんな僕のお
チンチンを

握って
上下に手を
動かした。

シコシコ
するからね

そのまま
おっぱい
吸っていいのよ

気持ち良い、
気持ち良い、
しょうね

麻美さんにおチンチンを
いじられると、
どんどん興奮して、

おチンチンが
硬くなっている
気がした。

僕は
恥ずかしさを
隠すためにも、

おっぱいに
しがみついて、
乳首を吸いまくった。

何かがおチンチンから出た感じがあった。

同時に凄く気持ち良い感じがして、全身が震えた。

わあ、凄い！
いっぱい出たね！

わあ、

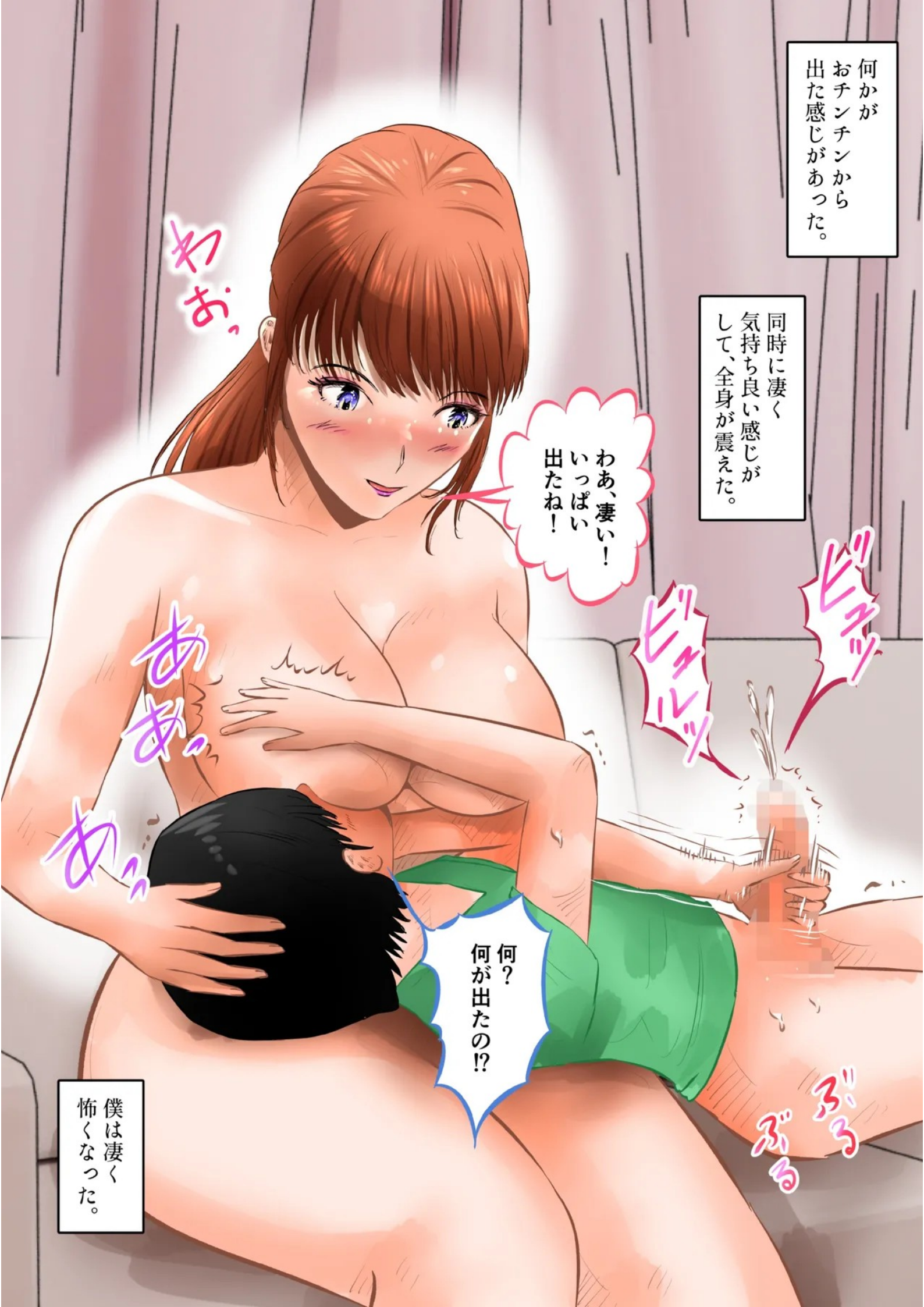
あ、あ、あ、

ビュッ
ビュッ
ビュッ

何？
何が出たの!?

ぶる
ぶる

僕は凄く怖くなった。



あのね、
精子って言って、

エッチして
気持ち良くなると
出るものなの

だから大丈夫

麻美さんが
説明してくれて、
僕は少し安心した。

おチンチン、
綺麗にして
あげるね

はぁぁ

あ..

あぁ..

ひん
ひん
ひん

ひん

ひん

そう言うど、
麻美さんは
僕のおチンチンを
口に啜えた！

ああっ！
汚いよ！

大丈夫。
精子は女の人に
元気を与えて
くれるの

そうなの!?

そうよ。
だから、いっぱい
びゅうびゅう出して

ああ、
翔君の精子
美味しい

お婆さん、
凄く幸せ

麻美さんに
喜んで貰えて、
僕も幸せだった。

どくんどくんどく



ああ、凄い、
もうこんな
大きくなって

麻美さんは、
また硬くなった
おチンチンを

舐めまくって、
口の奥まで
啜えた。

いっ

あ

ちや
ちや

ちや
ちや

それから上下に
頭を振って、
おチンチンを
口でしごき始めた。

はああ、ああ、
気持ちいい、
気持ちいいです……

あ、あ、
うん、うん

凄い快感だった。

耐えられそうも
なかった。

ああっ！
精子出ちゃう！
出ちゃうよ！

また、
あの湧き上がる
衝動を感じた。

くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ

とん
とん
とん
とん

僕は
何度も何度も
精子を出した。

麻美さんは
僕のおチンチンを
啜えたまま、

精子を
飲んで
いる
よう
だ
つ
た。

ん
ん
ん

びゅっ
びゅっ
びゅっ

びゅっ

僕は嬉しく、
幸せな気分
だった。

何回でも、
これをした
い
と
思
っ
た。

ああ、
凄い翔君

おチンチン、
大きいまま！

ああ

だって、
いっぱい精子
出したいんだもん

凄いよ翔君！
可愛い！

ああ、
我慢出来ない！

そう言うと
麻美さんは
パンティも脱いだ。

あのね、
おマンコって言って、
お股に穴があって、

そこにおチンチン
入れるとすっごく
気持ち良いの

男の人も
女の人も
気持ち良いの

い
ちんこ

お口で
するより？

そうよ、
お口よりも
気持ち良いの

ああ、欲しい、
欲しくて
たまらない！

ん
ん
ん



全裸になった
麻美さんは、

僕にまたがり、
おチンチンを
挿んだ。

はああ、
おチンチン
欲しい、
欲しいよ……

麻美さんは、
本当に
僕のおチンチンが
欲しそうだった。

麻美さんに
求められて、
僕は凄く
嬉しかった。

ああ、
入れちゃうよ、
入れちゃう、
ああ！

あ
あ……

ああっ！
あっ！ あっ！

麻美さんは、
しつかりと
腰を下ろし、

僕のおチンチンを
おマンコに
ズッポリと入れた。

は
あ
あ

その瞬間、
身体をビクビクと
震わせて、

何度も何度も
可愛い悲鳴を
あげた。

あ
あ
あ

あ

え

ああ、これ、
これが
欲しかったの！

ああ、
イク！
イッちゃっう！
ああっ！ あっ！

翔君の
おチンチン、
入れただけで
イッちゃったの！

……麻美さんも
精子出したの？

ううん、
女の人はイッても
精子は出ないの

でも、
凄く気持ち良くて
幸せな気分になるの

麻美さんが
幸せになって
くれたら、僕も
幸せだった。

それにエッチは
とっても
気持ち良かった。

ビーン
ビーン
ビーン

ああ、
おチンチン、
もつと味わいたい

麻美さんは、
そう言いながら
腰を回した。

ヌルヌルした
液体が、お股から
溢れてきた。

びび

びび

ちやん

ちやん

おマンコで
おチンチンが
しごかれるたびに、
幸せな快感を感じた。

おチンチン美味しい！
翔君のおチンチン、
美味しいよ！

僕は凄く
楽しい気分
になっていた。

麻美さんは、
激しく腰を
上下させた。

凄くいい！
おマンコ、
凄く喜んでする！

はぁ

はぁ

はぁ

ず
ず
ず
ず

おチンチンが、
ぬるぬるの
おマンコで
挟まれて、

撫でられて、
凄く気持ち
良かった。

翔君の
おチンチン、
凄く気持ちいい！

おマンコの
奥までグイグイ
入ってくるよ！

幸せ！
おばさん、
とっても
気持ちいいの！



麻美さんは、
腰を上下に
動かしたり、

左右や前後に
動かして
おチンチンを
お股で楽しんでいた。

あああ、だめ、
だめだあ、
おばさんイッちゃう、
イッちゃうよ……

麻美さんの
腰の動きが
早くなった。

おマンコから
ヌルヌルの液体が
いっぱい出て、

僕も気持ち良くて、
精子が出ちゃい
そうだった。

あっ
あっ

ちゅ
ら

ちゅ
ら
ちゅ
ら

ああ、精子、
出ちやうかも……

いいよ！
一緒に
イこう！

あぁっ！
あぁっ！ あぁっ！
あぁっ！

麻美さんは、
大きな声で叫ぶと、
身体をビクビクさせた。

同時に僕は
精子をドクドク
と吐き出すか
ジョボジョボ出した。

あぁっ
あぁっ
あぁっ

凄く気持ち
良かったけど、

こんなに出して
大丈夫なのか
不安になった。

はあああ、
凄い、
おマンコに翔君の精子、
いっぱい感じるよ

おマンコに
精子出して
大丈夫なの？

大丈夫よ。
私は特殊なお薬
飲んでるから、
いっぱい出して

お薬飲まないと
どうなるの？

子供が
できちゃう時も
あるの

ビッ
ビッ

ビッ
ビッ



ビッ

え!?

それを聞いて、
僕はとても
不安になった。

ごめんね、
驚かせて

あっ
うっ

愛し合う
男の人と
女の人が、

エッチすると
子供が出来る
場合があるの

でも、
しよっちゅう
出来ると困るから、

きちんと
お薬があるのよ

だから、
全然不安に
ならなくて
大丈夫よ

どんどん...

僕はそれを
聞いて安心した。

私と
エッチしたい？

あっ
あっ

したい！
いっぱい
したいよ！

僕は今でも
麻美さんのおマンコに、
おチンチンを入れて、

たくさん精子を
びゅうびゅう
出したかった。

とん
とん
とん

嬉しい！
私もしたい！！

精子、おマンコに
びゅうびゅう
出して欲しい！

ねえ、今度は
私が下になるから、
翔君が上になって

うん、
いいよ！

僕は麻美さんと
エッチが続けられて
良かったと思った。

まだまだ、
何回でも精子を
出したかった。

見て、おマンコ、
精子でドロドロ

翔君がかき混ぜて
くれたから、

おマンコ喜んで
愛液いっぱい
出してる

愛液？

あああ

気持ち良いと
出るの。

おチンチン
入れやす
くなるから

とろとろ

僕はおマンコには
色んな仕組みが
あるんだな、と思った。

ほら、
入れて入れて

麻美さんは、
自分から

おマンコを
広げて
僕を誘った。

おマンコは
ぽっかりと
穴が開いていて、

ピンク色の
ひだひだが
濡れて光っていた。

あは♡

わあ...

くちゅ
ちゅ

どういふわけか、
濡れたおマンコを
見ると、

僕のおチンチンは
より硬くなった。



ああ！
やっぱりいい！
翔君のおチンチン、
凄くいい！

僕は、麻美さんの
両足を持つて、

大きくなった
おチンチンを
おマンコに入れた。

あああ……
突いて、
たくさん突いて
かき回して……

麻美さんは
凄く気持ち
良さそうだった。

麻美さんが
喜んでくれると、
僕も嬉しかった。

僕は、
おチンチンを
おマンコ
の奥まで
入れた。

それから、
少し抜いて、
また、
奥まで
入れた。

あ
あ

あ

す

す
す

はああ、凄
い、
ガンガン
入
って
くる！

おマン
コ
気持
ち
い
い！

凄
く
い
い。
も
っ
と
突
い
て
か
き
回
し
て
！

僕は腰の動きを早くした。

この格好は、動きやすくて良かった。

おまんこにおチンチンを入れる瞬間も、

ちょっと抜く時も凄く気持ち良かった。

はっ

はっ

はっ

ぐちゃ

ぐちゃ

ぐちゃ

麻美さんが喜んでくれるのも気持ち良く、

おっぱいが揺れるのを見るのも良かった。

僕はさらに動きを早くした。

僕は麻美さんと
キスをした。

キスすると、
より麻美さんの
事が好きになった。

ん
ん
ん

ちゅ
ちゅ

キスも
いっぱい
したかった。

麻美さんは、
僕の唇を
舐めるように
キスしてきて、

僕は興奮し、
おチンチンを
もっと激しく
動かした。

翔君、
舌出して

言われて、
僕は舌を
出した。

麻美さんは、
僕の舌に吸い付き、
自分の舌で
チロチロ舐めてきた。

れろ
れろ
れろ

それも凄く
気持ち良かった。

舌が気持ちいい
なんて事があるんだ、
と思った。

ん
ん
ん

僕と麻美さんは
舌を舐め合いっこ
した。

はあ
はあ
はあ

ちゅる
ちゅる
ちゅる

その間も、
僕は激しく
おチンチンを

おマンコに
突っ込んだ。

おチンチンも
舌も気持ち良くて、
身体が熱くなった。

あの感じが
やってきた。

精子が
おチンチンから
出そうだった。

ああ
あああ...

どうせなら、
おマンコの奥深くに
どぴゅどぴゅ
したかった。

僕は力を込めて、
おチンチンを
目一杯おマンコに
突っ込んだ。

同時に精子が
出る感じがあった。

またまた、
凄い気持ち良さが
やってきた。

きた...

あ...

あ...あ...

びゅん

びゅん
びゅん

精子が
びゅびゅつて
出るたびに、
体が震えた。

麻美さんも
気持ちいいのか、
僕をぎゅつと
抱きしめてきた。

麻美さんに
しつかり
くっつきながら

精子を出すのは
気持ち良すぎた。

何回も
したいと思った。

でも、精子を
出しすぎて
心配になった。

僕は、
おチンチンを
抜いてみた。

はあ
あ
あ

ぷる

ぷる

すっごい
いっぱい出たね

麻美さんは
嬉しそうだったので、
僕は安心した。

え!!
まだ、おチンチン
大きいんだ!

うん、
まだしたい!

あはっ

ああ。

僕は正直に
言った。

いいよ、
もつとしようね

汗かいたから、
一緒に
お風呂入ろう！

うん、一緒に、
お風呂入りたい！

麻美さんと
お風呂に
入れるなんて
夢みたいだった。

シャワー浴びながら、
おチンチン
入れたいな、

と思いつつながら、
僕は麻美さんと
お風呂場に向かった。

続く